神奈川県立図書館でのウィキペディア編集イベントの開催報告

山本　真帆

はじめに

神奈川県立図書館（以下「当館」という。）では、2019年３月３日に「ひなまつりWikipedia　女性×かながわ」、同４月21日に「Wikipediaブンガク 松本清張」の二回のウィキペディア編集イベントを行った。

当館は2015年より基本理念として、「知」を集積し、新たな「知」を育む「価値創造」の場として、神奈川県の文化と産業の発展、社会づくりに寄与するということを掲げている[1)]。また、2016年度には、神奈川県教育委員会が「県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方」を策定しており、そこでも今までの専門的、広域的な機能に加え、「目指すべき県立図書館像」として「価値を創造する図書館」を新しく付加した[2)]。

価値を創造する図書館とはどのような図書館なのかということや、今後建築が予定されている新棟における様々な学習の場での事業展開について検討しているところに、県立高等学校の司書から県立図書館での新たな事業として今回の企画が持ち込まれ、ウィキペディア編集イベントを主催する運びとなった。

本稿では、ウィキペディア、ウィキペディアタウンの概略をまとめるとともに、一担当者として当館での実践を通して考えた、これからの図書館とウィキペディアの関係についての考察をまとめる。

1　図書館とウィキペディア

1.1　ウィキペディアとは何か

ウィキペディアとは、非営利団体であるウィキメディア財団が主催する、インターネット上の無料の百科事典サイトである。ウィキペディア自身による自己定義によれば、ウィキペディアとは「信頼されるフリーなオンライン百科事典、それも質・量ともに史上最大の百科事典を、共同作業で創り上げることを目的とするプロジェクト、およびその成果である百科事典本体のことである。」

とある[3]。

ウィキペディアは、2001年にジミー・ドナル・ウェールズによって創設された。ウェールズは、それまで一般的であった、契約制の有料オンライン百科事典とは違う、だれもが無料で情報を利用できる百科事典を創ろうと考えた。最初に立ち上げられたプロジェクトは、「ヌーペディア」と名付けられた。この名前は、百科事典を意味する「エンサイクロペディア」と、完全に無料で使えるソフトウェアの開発を目的としたプロジェクトの「GNU[4]」からきている。ヌーペディアは、現在のウィキペディアとは違い、それぞれの記事は様々な分野の学者や専門家であるボランティアによって書かれた。しかし、最初に書かれた記事は2000年に公開されたが、その後の一年間で書かれた記事は50にも満たなかった[5]。書き手に学位記を確認し、記事の割り当てを行い、記事の内容を確認するなど、記事の質を高めるために長い時間をかけてからインターネット上で公開したからである。

そこで、世界中のどこでも誰でも簡単にページの編集ができるシステムである、「ウィキ[6]」と呼ばれるシステムに注目した。ウィキは、ウォード・カニングハムというプログラマーによって開発された。ウィキという名前は、ハワイの言葉で「素早く」という意味である wikiwiki からつけられた。ウィキは新しい項目の追加や編集が容易で、自動的に生成される一覧ページや検索機能を備えている。思い立ったらすぐに作成でき、それほど手間をかけずに目的に合ったページが作成できるシステムは、ウィキペディアの特性を決定づけた。実際、ウィキのシステムを取り入れたウィキペディアは、2001年1月15日にスタートしたが、1月の終わりまでにウィキペディアの記事は合計600になっていた[7]。ウィキペディアがスタートしたという情報はインターネット上のコミュニティで共有され、誕生して間もないサイトのために新しい記事を書こうという熱心なボランティアたちが集まってきたのである。

1.2　ウィキペディアの特徴

ウィキペディアには、すべての指針の基礎となる五本の柱がある[3]。「ウィキペディアは百科事典である」「ウィキペディアは中立的な観点に基づく」「ウィ

キペディアの利用はフリーで、だれでも編集が可能である」「ウィキペディアには行動規範がある」「以上の四つの原則の他には、ウィキペディアには、確固としたルールはない」。以上の基本原則を基に、方針とガイドラインが設定されている。

方針とガイドラインについて、特に図書館の立場から注目すべき事柄は、中立的な立場で書くということと、独自研究は書かない、検証可能なことだけを書くということだ。ウィキペディアで記事を書くときには、本来は出版された図書や雑誌等で発表された資料を複数にあたって記事を執筆するべきであるとされている。これらのことから、ウィキペディア記事の編集には図書館資料が必要不可欠であると考えられる。

1.3　ウィキペディアはどのようにして評価されていったか

ウィキペディア上の記事は、すべてボランティアたちにより共同作業で執筆されている。例えば『ブリタニカ百科事典』や平凡社の『世界大百科事典』など、一般的な百科事典ではそれぞれの分野の識者が分担し執筆する形態を取っている。ウィキペディアの前身である、ヌーペディアが目指したのも、同じ形態であった。対して、ウィキペディアでは一般の利用者が自由に項目を増やしたり執筆したり編集したりすることができるようになっている。これは、ウィキペディアの莫大な記事項目数を実現した。一方で、内容が数行しかない雑な記事が乱立したり、企業や個人による宣伝行為、デマを流布する目的の悪意ある投稿などが発生したりといった事態が発生した。

2005 年頃、ウィキペディア英語版の記事において、元ジャーナリストがアメリカ大統領の暗殺に関与していたとする記述が匿名の寄稿者によって公開された件で、ウィキペディアへの批判の声が上がった[8)]。これをきっかけに、ウィキペディアの名誉棄損問題は大きく波紋を呼んだ。

同じく 2005 年には、ウィキペディアと『ブリタニカ百科事典』を比較する検証実験について学術誌ネイチャー誌が発表した[9)]。この実験は、ウィキペディアに関する論文や新聞記事に頻繁に引用される。この実験は、ウィキペディアとブリタニカの双方からさまざまなトピックを選び出し、各分野の専門家に

どちらのサイトから抽出されたかを告げることなく比較することを求めたものだ。その結果、極めて重要な概念に関する一般的な誤解など、深刻な誤りが見つかったものはウィキペディアもブリタニカもそれぞれ４件ずつだった。また、細かいミスはウィキペディアには162件、ブリタニカのほうは123件だった。数字で見ると、ブリタニカのほうがウィキペディアよりも多少正確であるという結果である。これを引用して、ウィキペディアの情報はブリタニカと同じくらい正確であると報じたメディアがある一方、ブリタニカ側からは、この検証は十分ではないという指摘もある[10)]。

2006年から2007年には、『The cult of the amateur. How today's internet is killing culture』（邦題『グーグルとウィキペディアとYouTubeに未来はあるのか[11)]』）、『LA REVOLUTION WIKIPEDIA』（邦題『ウィキペディア革命[12)]』）など、ウィキペディアの悪影響を指摘する書籍も発行された。

一方日本でのウィキペディアの定着はどうだっただろうか。『現代用語の基礎知識』を開いてみると、ウィキペディアの項目が初出するのが、2006年版[13)]である。一方、『イミダス』[14)]及び『知恵蔵』[15)]には2007年の休刊当時の号にも掲載がない。これらの現代用語集が「ネットで手軽に用語検索できるようになった影響などから発行部数が減少した[16)]」ため休刊した事実を鑑みると皮肉な話ではあるが、2006 年前後には日本においてもウィキペディアが一般に定着していたと考えてよいだろう。

日本のウィキペディアの記事は、あまりにもサブカルチャーの分野に偏りすぎているという指摘もある。英語版やフランス語版のウィキペディアでは、ウィキペディアの編集回数をランキングにすると、政治的・宗教的著名人の項目が上位にランクインするが、日本語版では上位五位がすべて漫画やアニメに関するものであるという[17)]。この傾向は、現在のウィキペディア上でも確認することができる[18)]。実際問題として、ウィキペディアには、百科事典では取り上げないような特異な項目や、百科事典的ではないユーモアが込められた文章なども含まれている。2007年に発売された『笑うウィキペディア』という書籍[19)]では、2007年当時のものではあるが、特異な記事が紹介されている。ここでは、「鯨の爆発」（座礁鯨などの死体が、腐敗により死体内部にメタンガスなどが

蓄積、膨脹し破裂する現象)、「枕投げ」「アホ毛」等、『広辞苑』や『現代用語の基礎知識』にも掲載がないようなニッチ語句が多く詳細に掲載されている。

一方で、2018 年には、国内での実験では、「レイアウトを取っ払ってみたら、「ウィキペディア日本語版」は「日本大百科全書」よりも信憑性が高いと認知された」という報告[20]もされている。

1.4　図書館におけるウィキペディアの評価

ウィキペディアは、発足当時より期待と同時に様々な評価にさらされた。「国立国会図書館サーチ」及び「CiNii Articles － 日本の論文をさがす」でウィキペディア及び Wikipedia を検索した際に最も古い論文としてヒットする『オープンコンテンツの百科事典ウィキペディア』2003 年[21]で、福田亮はウィキペディアを新しい形式の知的協働作業として評価する一方、問題点として

1．内容全体を把握し、調整する編集者が存在しないため、分野ごとの記事の記述レベルや分量に偏りが生じる
2．内容精査のためより多くの参加者を獲得しなければならないが、規模が拡大するほど「観点の中立性」を維持するための政治的努力が必要になる
3．コピーレフト契約は米国著作権法を基に考案されたものであり，法制度の異なる国で問題が生じた場合について法的有効性が保証されていない。また、フリーでない著作物を勝手に利用してしまうようなことがあれば、それがウィキペディアの企画全体を左右しかねない。

という３点を指摘し、「ウィキペディアは立上げからまだ 3 年にも満たない若い企画であり、課題がどのように解消されていくのか、今後とも見守っていく必要がある。」と締めくくっている。

また、2006 年３月、『デジタル・レファレンス・ツールとしての Wikipedia』[22]で、兼宗進はレファレンスツールとしてのウィキペディアの利用の可能性と課題を検討している。その中で、レファレンスツールとしてのウィキペディアの使い方について３点あげて指摘している。

1．項目数が多く、最新の項目についても開設されていることが多いため、概要をつかむ使い方には適している

2．ウィキペディアのページには関連のある外部サイトへのリンクが貼られていることが多いため、参考になるサイトや文献を見る使い方には適している

3．記述が簡潔であり、項目の充実度は分野によっても偏りがあるため、吟味が必要である。

このように、情報の精査は必要なものの、使い方次第ではレファレンスにおいても活用が可能であることが紹介されている。

しかし、実際の図書館の現場や書籍の上では、ウィキペディア上の情報の活用に対しては否定的な言説が多く見られる。レファレンスサービスやレファレンスツールについて書かれた図書の索引を引いても、ウィキペディアを取り上げているものは少ない。

日本図書館協会から現在第９版まで刊行されている、毛利和弘『文献調査法－調査・レポート・論文作成必携』には、2014 年の第６版[23]にはウィキペディアの項目は掲載されておらず、登場したのは 2016 年発行の第７版[24]からである（なお、索引でウキペディアと誤字されているのは余談である）。そこには「多言語インターネット百科事典プロジェクト『ウィキペディア』の日本語版。誰でも参加できるので、記述の信憑性に注意」とのみ記載されている。また、同じく日本図書館協会発行の『図書館用語集』及び『図書館ハンドブック』には現在まで項目がとられていない。

一方、丸善より発行されている『図書館情報学用語辞典第４版[25]』では、「インターネット上で公開され、だれもが自由に執筆、修正できる百科事典を構築するプロジェクト。またはその事典。（中略）誰もが修正できるため、その正確さが課題となるが、2005 年の Nature 誌の調査によると、自然科学の項目に関する正確さは Encyclopedia Britannica と遜色がなかった。」と、前述の Nature 誌の調査の件についても触れられている。だが、これだけでは、ウィキペディアを信用してよいのか悪いのか読者が混乱してしまうだろう。

しかし、「ウィキペディアは誰でも書き込めるので信用できない」との認識だけを持つことは、適切ではない。１で見てきたように、ウィキペディアは、「だれでも書き込める百科事典」を創っているのではなく、「信頼されるフリ

ーなオンライン百科事典」を共同で作ることを目的としたプロジェクトであるからだ。もちろん、「ウィキペディアは信用できる」と断言するのも危険なのは言うまでもない。とはいえ、ウィキペディアが年々存在感を増していく中、図書館としても、ウィキペディアとのかかわりや活用方法等を模索していくべきではないだろうか。

2　ウィキペディアタウンとは何か

ウィキペディア日本語版によれば、ウィキペディアタウンとは「その地域にある文化財や観光名所などの情報をインターネット上の百科事典『ウィキペディア』に掲載し、さらに掲載記事へのアクセスの容易さを実現した街（町）のことである」とある[26)]。

世界初のウィキペディアタウンは、2012 年にイギリスのウェールズにあるモンマスという町で行われた「モンマスペディア」というプロジェクトである。[27)] 町のなかの博物館や学校などの建造物・展示物に QR ペディアと QR コードが取り付けられており、スマートフォンからウィキペディア記事にアクセスすることができる。

一方、日本では 2013 年、神奈川県横浜市において行われた、街を歩いて歴史的建造物についての記事をその場で作成しウィキペディアに投稿するというワークショップが最初とされている。そこから転じて、日本においては街(町)そのものを指す語句としてよりも、主に地域に関するウィキペディア記事を編集するイベントを「ウィキペディアタウン」と呼ぶことが定着しつつある。

2013 年から 2018 年までに開催されたウィキペディアタウン 221 回のうち、公共図書館が主催したものは46回でシビックテック団体に続き２番目に多く、会場が公共図書館で行われたものは 99 回で最多である[28)]。これらのウィキペディアタウンにおける図書館の占める割合は、年を追うほどに増加している。また、CiNii で「ウィキペディア　図書館」で検索すると、ヒットする論文は 25 あるが、そのうち 17 件がウィキペディアタウン及びウィキペディア編集イベントについてである。内 10 件がライブラリー・リソース・ガイドのウィキペディアタウン特集号掲載の記事からであるとはいえ、ウィキペディアタウン

に対する図書館界からの注目度がうかがえる。

イベントは主にウィキペディアの「プロジェクト:アウトリーチ/ウィキペディアタウン[29]」ページ上において開催情報や成果の記録やメソッドの共有が行われている。このサイトに掲載されているプロジェクトには、街歩きとともに地域の情報に関するウィキペディア記事を編集するイベントが中心ではあるが、その他美術館主催のアート関連情報を編集するWikipedia ARTS、お酒の名産地を訪ねて編集する酒ペディア、文学館とコラボしたWikipediaブンガクなども掲載されている。

また、これらの活動は、日本のNPO法人「知的資源イニシアティブ (IRI)」による先進的な活動を行っている図書館などを表彰するLibrary of the Yearにおいて、2017年度の優秀賞を受賞した[30]。

3　当館でのウィキペディア編集イベントの実践

3.1　概要

はじめに、当館でウィキペディアタウンが開催できないかということについて、県立高等学校の司書より提案があったのは2018年10月のことである。イベントはウィキペディアタウンを参考に計画されたが、実際のイベントは女性関連項目の編集イベント及び文学関連項目の編集イベントとなった。街歩きは含まれず、狭義ではウィキペディアタウンという呼称が適切であるか疑問が残るため、本稿では当館で行われた二つのイベントについては「ウィキペディア編集イベント」と呼称する。

イベントの開催を検討した時点において、当館にはウィキペディアの編集の経験者が極めて少なかった。そのため最初にひなまつりWikipediaの講師を依頼した海獺(らっこ)氏より職員全体向けの研修を行い、イベント従事者を中心にワークショップを体験した。

その後、当館の特色に合わせた新規項目を検討した。項目の選択には、ウィキペディアで新規項目を立てるのにふさわしい価値があるかどうか（ウィキペディアではこれを「特筆性」と表現している）を検討し、当館所蔵資料で複数出典を当たれるかどうかや客観性のある資料が用意できるかの状況のほか、神

奈川との関わりなどを考慮した。

当日に向けた準備としてミーティングを重ね、それぞれ担当する項目についての知識を深めるとともに関連資料を準備した。

そして、その後2回のウィキペディア編集イベントを行った。当日は各項目に担当の司書が一人付き、用意した資料の説明のほか、その他必要な資料については調査のフォローを行った。詳細は、以下のイベントごとの経緯と内容にて触れる。

3.2　イベントごとの経緯と内容

3.2.1　館内向けのウィキペディア研修

日時：2019年1月10日(木)
場所：神奈川県立図書館セミナールーム
講師：海獺氏（ウィキペディア日本語版元管理者）
参加者：当館職員全員

館内でウィキペディア関連イベントを行うにあたり、事前に全館職員向けにプレイベントとして全体研修でウィキペディアとは何かということについての研修を行った。理念や運営や規模、編集の考え方などについてご講義をいただいた。

3.2.2　館内向け編集イベントワークショップ

日時：2019年1月10日(木)
場所：神奈川県立図書館パソコン研修室
講師：海獺氏
参加者：当館職員の希望者22名
執筆対象：二宮尊徳、伊勢山皇大神宮ほか県内関連項目のWikipedia記事への出典記載

全館向けの研修の後、希望者とイベント従事者を対象に出典を追加で記載す

るワークショップを行った。ここでは、実際にウィキペディアの編集を行うことで、ウィキペディアの仕組みと参加者側の気持ちを理解することができ、それにより当日の運営における注意点や課題を洗い出すことができた。また、イベント従事者だけではなく、各課希望者からも参加を募ることで、新たな事業への理解を得る意味もあった。参加できなかったイベント従事者には、別途ワークショップを実施した。

3.2.3　ひなまつりWikipedia 女性×かながわ

日時：2019年３月３日（日）10:00〜16:00
主催：神奈川県立図書館
場所：神奈川県立図書館
講師：海獺氏、北村紗衣氏（武蔵大学准教授）
参加申込：27名
当日の参加者：21名
執筆対象：神奈川県立かながわ男女共同参画センター、神奈川婦人会館、川喜多かしこ、佐藤美子、九重年支子（すべて新規作成記事）

当日のスケジュール
１．「ウィキペディアってなに？記事ってどうやって書くの？」（海獺氏）
２．ウィキペディアとジェンダーギャップ（北村氏）
３．神奈川県立図書館ツアー
４．調査＆編集
５．発表＆まとめ

当館で最初に開催したのが、この「ひなまつりWikipedia」である。

当館には、かながわ女性センターが2015年４月に藤沢合同庁舎内に移転したことに伴い、同センター図書館が所蔵していた図書資料等が移管されたため、現在７万７千冊を超える豊富な女性関連資料の所蔵がある。今回は、３月３日のひなまつりに合わせて、神奈川の女性関係の項目を中心に執筆した。

最初にウィキペディアについての解説と記事の書き方について海瀬氏、ウィキペディアにおける女性関連記事の現状に関するご講義を北村紗衣氏にいただいた。その後、各項目４名ずつほどのグループに分かれ、館内ツアーを行い、館内のどこに関連資料があるのかを中心に紹介した。関連資料の調査と編集には、経験豊富なウィキペディアン（ウィキペディア編集・執筆者のことを指す）と、資料担当の図書館スタッフが各テーブルに１名ずつ付き、それぞれ編集の指導とレファレンス協力を行った。

作成した項目の詳細

◆神奈川県立かながわ男女共同参画センター

https://ja.wikipedia.org/wiki/神奈川県立かながわ男女共同参画センター

神奈川県立かながわ男女共同参画センター、通称かなテラスは、旧神奈川県立婦人総合センターから旧神奈川県立かながわ女性センターへと変遷があり、テーマ「かながわ×女性」としては外せないのではないかということで新規項目候補として設定された。当館所蔵の『神奈川県立かながわ男女共同参画センター　かなテラス 事業概要』ほか、雑誌や婦人総合センター設立時の館長である金森トシエの追悼文集などを用意し、執筆された。

◆神奈川婦人会館

https://ja.wikipedia.org/wiki/神奈川婦人会館

神奈川婦人会館は、当館と神奈川県立音楽堂に隣接しており、それらと同じく前川國男氏による設計である。日本初の婦人会館という特筆性もあり、当館の近くにある施設なので、イベント当日、写真を撮って載せることもできると考え新規項目候補として設定された。結果的には会館へ許可を取る時間が取れず写真掲載は見送った。周年記念誌等の他、参加者の希望により神奈川新聞の製本版にも当たって執筆。

◆川喜多かしこ（かわきた・かしこ）

https://ja.wikipedia.org/wiki/川喜多かしこ

夫とともに日本の映画文化の発展に寄与した人物であるが、夫である川喜多長政の記事の他、英語版の記事「Kashiko Kawakita」があるものの日本語版の記事はなかった。鎌倉市に旧邸宅を基にした川喜多映画記念館があり、当時の神奈川新聞にもその経緯が何度か掲載されている。ウィキペディア英語版からの翻訳というアプローチもできるのではないかと考え新規項目候補として設定。結果的には当時の新聞の他、『キネマ旬報』などから新たに書き起こした。

◆佐藤美子（さとう・よしこ）
https://ja.wikipedia.org/wiki/佐藤美子
佐藤美子は横浜のオペラ歌手であり、1972 年には神奈川文化賞も受賞している。当館に併設されている県立音楽堂の建設の推進団体の代表でもあった。人名事典のほか、県立音楽堂の年史、女性関連資料として所蔵されている評伝、列伝などを中心に執筆。

◆九重年支子（ここのえ・としこ）
https://ja.wikipedia.org/wiki/九重年支子
九重年支子は簡易織り機等の発明家であり、晩年を川崎で過ごした。
著作は女性関連資料室を中心に複数当館で所蔵がある。また、新聞データベース等からも当時開催されたコレクション展の様子を知ることができた。

「ひなまつり Wikipedia」では、新規項目を多く編集した。新規記事の項目を作成することは、その後の編集の呼び水になる。実際、ここで作成した新規記事は、イベント当日後に複数回編集が行われ、内容の充実が図られている。それらの編集は、イベント参加者によるその後の調査も含まれているが、イベント非参加者によるものもある。

イベント当日にゼロから項目を作成することは難易度が高く熟練したウィキペディアンによる支援がないと難しいが、ゼロから作ることの敷居が高いのは、イベントに参加していないほかの編集者にとっても同じである。新規項目を作成し参考文献を記載しておくことで、その後その項目に興味を持ったウィ

キペディアンによる編集を期待することができることがわかった。

3.2.4 Wikipedia ブンガク 松本清張

日時：2019 年４月 21 日（日）10:00～16:30
主催：神奈川県立図書館
後援：神奈川近代文学館
場所：神奈川近代文学館 中会議室
　　神奈川県立図書館 本館１階 多目的ルーム
講師：神奈川近代文学館学芸員、Shohei Arai 氏（ウィキペディアン）
参加者：計 14 名
執筆対象：「相模国愛甲郡中津村」（新規）、「日本の黒い霧」（新規）、藤井康栄（加筆）、松本清張（加筆）、北九州市立松本清張記念館（加筆）、「砂の器」（出典追加）、『旅』（雑誌）（出典追加）、松本清張賞（加筆）

当日のスケジュール
【午前】－神奈川近代文学館 中会議室
１．ガイダンス
２．特別展「巨星・松本清張」見学（解説）
移動
【午後】－神奈川県立図書館　本館１階　多目的ルーム
３．調査・記事執筆
４．まとめ

当館で二番目に開催したのが、この「Wikipedia ブンガク 松本清張」である。「Wikipedia ブンガク」は文学に特化したウィキペディア執筆イベントであり、ウィキペディアタウンで言う街歩きの代わりに企画展を見て関連記事を執筆するというイベントである。過去二回の事例については、『Library Resource Guide』に掲載された事例報告[31]が詳しい。

事前の申込み人数は 18 名、当日は 14 名が参加した。参加者のうちウィキペ

ディア編集未経験者は４名、少しあるが５名、かなりあるが４名である。

神奈川近代文学館において「巨星・松本清張展」に関して学芸員よりギャラリートークをいただき、その後展示を見学した。昼休憩をはさみつつ当館に移動し、ウィキペディアの考え方やマークアップの方法などについて説明した。その後、日本の黒い霧・藤井康栄・相模国愛甲郡中津村・出典捜索追記ワークショップの４グループに分かれて編集作業を行った。

作成した項目の詳細

◆「相模国愛甲郡中津村」

https://ja.wikipedia.org/wiki/相模国愛甲郡中津村

相模国愛甲郡中津村は松本清張執筆の短編小説である。神奈川県愛川町中津が舞台となっており、実際の藤田組偽札事件に取材している。当時の事件の背景を含め記事にまとめた。

◆「日本の黒い霧」

https://ja.wikipedia.org/wiki/日本の黒い霧

日本の黒い霧は、松本清張により『文藝春秋』に連載されたノンフィクション作品である。ベストセラーとなった作品であるが、当編集イベント開催時においてはまだ記事が存在しておらず、新規の記事作成となった。

◆藤井康栄（松本清張記念館初代館長）

https://ja.wikipedia.org/wiki/藤井康栄

藤井康栄は松本清張の元担当編集者であり、松本清張記念館の名誉館長。イベント開催時点でウィキペディアに既に記事はあったが、本人によって書かれた１冊の出典のみに頼っており、加筆訂正が求められていた。

神奈川近代文学館における松本清張展でも、藤井康栄に関する展示があった。松本清張記念館による雑誌『松本清張研究』などを基に加筆を行った。

「Wikipedia ブンガク」では、午前中は神奈川近代文学館を訪問した後移動

したこともあり、編集に取り組める時間が前回の「ひなまつり Wikipedia」より短かった。そのため、未経験者への編集方法の指導を行いながら新規記事の作成を進めるのは困難であることが想定されたため、ここではウィキペディア編集経験の無い参加者を別のテーブルに分け、編集方法の指導を個別に行った。この方法では、経験者はじっくり編集に取り組むことができ、初心者はウィキペディアとは何かというところから簡単なレクチャーを受け、編集のしかたについても質問がしやすい環境となった。

どちらのやり方にも一長一短があるため、編集項目の傾向や参加者の人数などにより、どちらの方式のほうが良いか検討しながら設定する必要があると思った。

3.3　アンケートからわかる参加者の傾向と反応

3.3.1　ウィキペディアの編集経験があるか（事前アンケート）

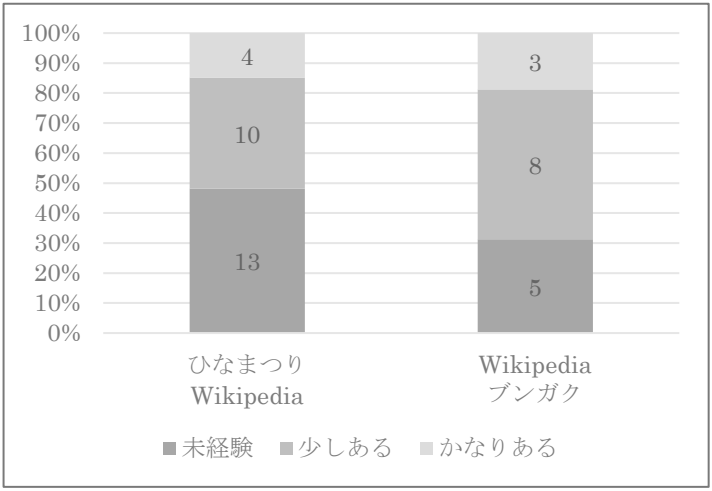

図１　ウィキペディアの編集経験があるか（事前アンケート）

これは、イベントへの参加申込時に行っているアンケートでの回答をグラフにしたものである。そのため、当日参加しなかった人も含まれるため、実際の参加者と人数が合わないことにご留意いただきたい。ウィキペディア編集イベントへの参加は、ウィキペディア編集経験者と未経験者が混在してい

る。その比率によって、イベントの構成について検討が必要なことは前述の通りである。また、「ひなまつり Wikipedia」イベント終了後に、「Wikipedia ブンガク」についての告知も行ったため、前回「未経験」だった参加者が、２回目の「Wikipedia ブンガク」で「少し編集経験がある」として参加することもあった。

3.3.2　参加者の年齢層（当日アンケート）

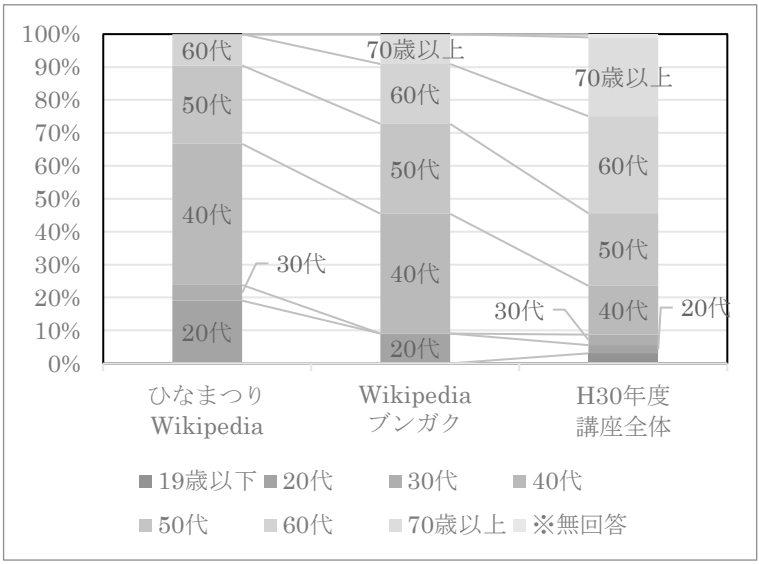

図２　参加者の年齢層（当日アンケート）

当館においては、講座参加者は60歳以上が半数以上を占める傾向があるが、ウィキペディア編集イベントへの参加者の年齢の比率は、平成 30 年度に当館が実施したほかの講座全体の平均より若かった。また比率を見ると、30 代は少ないものの、各世代が均等に参加していることがわかる。当館におけるウィキペディア編集イベントは、幅広い年代層が参加し共同で同じ項目を編集することができ、図書館内で新しいコミュニティを創ることができるイベントであったと思われる。

3.3.3　受講してどのような効果があったと感じるか（当日アンケート）

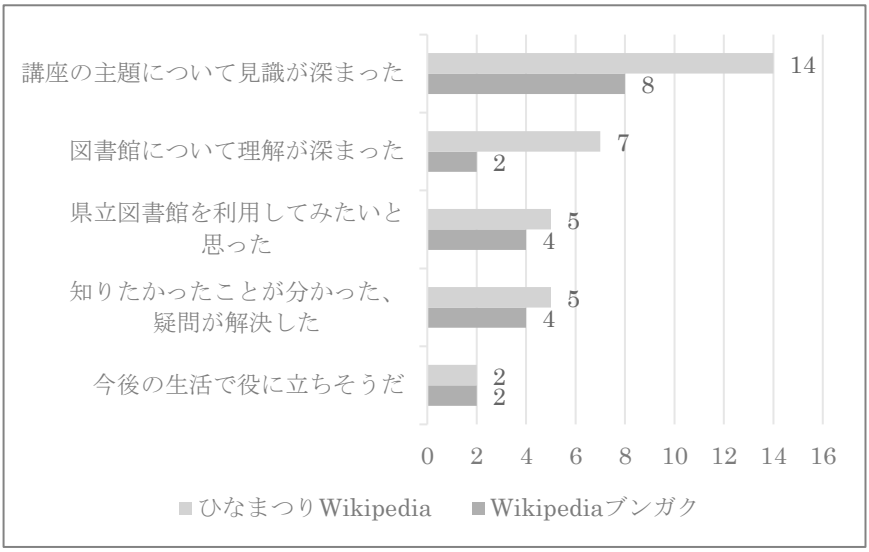

図３　受講してどのような効果があったと感じるか

利用者がイベントから感じた効果は、「講座の主題について見識が深まった」が最も多かった。一方、「図書館について理解が深まった」「県立図書館を利用してみたいと思った」との回答は数字の上では期待より多くなかった。

3.3.4　自由記述（一部抜粋）

ひなまつり Wikipedia

・様々な資料が揃っているのはさすが県立図書館！！って思いました。準備などありがとうございました。

・日頃不思議に思っていたウィキペディアのことを知ることができて貴重な体験となった。もっと広く一般の人に向けて、イベント開催情報が伝わるといいな、と感じた。

・街歩きをしながら行うウィキペディアタウンも行えたら嬉しいです。

・資料をたくさん使うことができて大変よかったです。ありがとうございました。

・ぜひ定期的にやりましょう！

Wikipedia ブンガク
・前回のイベントで今回の講座を知りました
・Wikipedia の編集に興味があり受講しました
・たくさん資料を用意していただいてありがとうございました！
・神奈川、横浜の人物についても取り上げてほしい

アンケートの数字には表れなかったが、自由記述欄からは、編集で使用した当館の関連資料について参加者が満足している様子が見て取れる。また、参加者は、街歩きをしながら行うウィキペディアタウンや、地域の人物についてのウィキペディア編集イベントなど、地域と関わりの強い項目を題材としたウィキペディア編集イベントを期待していると思われる。

4　結論と考察

4.1　ウィキペディア編集イベント開催を図書館で行う利点

当館でのウィキペディア編集イベントを通して、図書館でウィキペディア編集イベントを行うことは、三つの利点があると感じた。一つ目は、図書館資料を生かせること、二つ目は調査研究の発表の場の提供ができること、三つ目はリテラシー教育となることだ。

一つ目の図書館資料を生かすという点で、ウィキペディア編集イベントはとても優れていたと言える。２回のウィキペディア編集イベントでは、図書に加え、雑誌や新聞など、様々な媒体の図書館資料が利用された。参加者のアンケートからは、図書館の豊富な資料と司書による支援に満足している様子が読み取れた。一方、ウィキペディア編集イベントの充実度は、当然その図書館の蔵書状況や司書のレファレンス能力にも左右される。神奈川県立の図書館は、社会・人文分野の資料、女性関連資料及び地域資料を中心に収集する当館と、工学・産業技術・自然科学分野の資料を中心に収蔵する県立川崎図書館の２館体制である。当館でウィキペディア編集イベントを行うならば、女性関連資料や

地域資料を活用するイベントが向いているといえる。アンケートからは、図書館として行うならば、内容は地域に関するもの、その図書館の強みとなる題材を選択するほうが利用者の満足感が高い様子が感じられた。

二つ目の調査研究の発表の場の提供としての面は、ほかの図書館イベントにはあまり無い特徴である。当館では、平素より論文の書き方の講座や、調査研究を支援する講座等の事業を行っている。しかし、利用者が何らかの発表を行うための場というのは設定できていない。自費出版資料に関しても、かなり絞った形での受入となっている。そこに、ウィキペディアの編集というのは一つの発表の場の提供となりうるのではないだろうか。もちろん、ウィキペディアの「独自研究は載せない」という方針[32]を遵守する必要はあるが、図書館資料を活用して調査したことを発表し、ほかの人に見てもらうことができる機会や場を提供できることは貴重である。

三つ目のリテラシー教育としての効果のあるイベントは、講師のウィキペディアンとの連携によって行うことができた。ウィキペディアは、著作権侵害のある記事や、出典が明らかでない情報が含まれているから信頼できないといわれることがある。当館でのウィキペディア編集イベントでは、ウィキペディアの編集に精通した講師の方々のご協力により、ウィキペディアの編集の仕方だけではなく、著作権の話や、資料の調査方法についても触れ、情報リテラシー教育も含めたイベントとなった。これは、ウィキペディアの記事を充実させるのみならず、ウィキペディア執筆者のウィキペディア理解を深める意味も持っている。図書館としてウィキペディア編集イベントを行うならば、そのイベント内での質の高い記事の提供を目指すのみならず、今後とも図書館資料を活用しながら執筆してくれることを期待したい。

4.2　これからの図書館とウィキペディアの関係

これまで、図書館にとって、情報とは収集するものであり、情報資源はその正確性を見極める必要がありウィキペディアの利用については慎重であるべきだとされてきた。ここまで見てきたように、だれもが執筆者となることができるウィキペディアには、情報量や更新の速さ、執筆者の情熱という利点があ

りつつも、悪意や誤りを完全には防げないシステム上の特徴があるということは確かである。しかし、ウィキペディアの理念においては、ウィキペディアの記事に間違いを見つけたときは「So Fix It（では、それを修正しよう）」と唱えられている[33]。不正確さについて不平を言っている本人が、それらを更新する仕組みや力を持っているのだ。

正確性に欠けることもあるが、常に利用者が更新し、広がり続けるウィキペディアと、信頼性のある情報を蓄積し続ける図書館は、お互いを補いあう事ができる可能性がある。図書館からの情報発信の一つとして、郷土資料の活用方法として、図書館の特別コレクションの活用や広報として、ウィキペディア編集イベントを継続的に開催していくことは、大いに意義があることなのではないかと思った。

注、引用・参照文献

1) 神奈川県立図書館. 神奈川県立図書館事業要覧　平成２７年度. 神奈川県立図書館, 2015, 45,16p.

2) 神奈川県教育委員会. “県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方”. 神奈川県ホームページ. http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/life/1079182_3681671_misc.pdf, (参照 2019-09-30).

3) “Wikipedia:ウィキペディアについて”. ウィキペディア. https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:ウィキペディアについて, (参照 2019-09-30).

4) “GNU オペレーティング・システム”. フリーソフトウェアファウンデーション. https://www.gnu.org/home.ja.html, (参照 2019-11-17).

5) スーザン・メイヤー. ウィキペディアを創ったジミー・ウェールズ. 岩崎書店, 2013, p.46.

6) ケイ・ライターズクラブ. ビジネス Wiki 導入・活用ガイド BOOK. ASCII, 2006, p.12-13.

7) スーザン・メイヤー. ウィキペディアを創ったジミー・ウェールズ. 岩崎書店, 2013, p.53.

8) “フリー百科事典『ウィキペディア』、投稿ルールを強化”. WIRED. 2005.12.8. https://wired.jp/2005/12/08/フリー百科事典『ウィキペディア』、投稿ルール/, (参照 2019-11-17).

9) “『ネイチャー』誌、ウィキペディアの正確さを評価”. WIRED. 2005.12.19. https://wired.jp/2005/12/19/『ネイチャー』誌、ウィキペディアの正確さを評/, (参照 2019-11-17).

10) Fatally Flawed. “Refuting the recent study on encyclopedic accuracy by the journal Nature.”. Encyclopædia Britannica, Inc. 2006.3. https://

corporate.britannica.com/britannica_nature_response.pdf, (参照 2019-11-17).
11) アンドリュー キーン. グーグルとウィキペディアと YouTube に未来はあるのか? Web2.0 によって世界を狂わすシリコンバレーのユートピアンたち. サンガ, 2008, p.217.
12) ピエール アスリーヌ. ウィキペディア革命―そこで何が起きているのか? . 岩波書店, 2008.
13) 現代用語の基礎知識. 自由国民社, 2006.
14) イミダス. 集英社, 2007.
15) 知恵蔵. 朝日新聞社, 2007.
16) “「イミダス」「知恵蔵」休刊　ネットに移行”. ITmadia. 2007.8.31. https://www.itmedia.co.jp/news/articles/0708/31/news107.html, (参照 2019-11-17).
17) 茂木健一郎. 日本のネット文化を変えるには. 日経サイエンス. 2008, 38(14), p.100.
18) “編集回数の多いページの一覧”. ウィキペディア. https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:編集回数の多いページの一覧, (参照 2019-11-17).
19) ポストメディア編集部. 笑うウィキペディア. 一迅社, 2007.
20) 佐藤翔. かたつむりは電子図書館の夢を見るか LRG 編(第 8 回)事典は見た目の影響が 3 割? : レイアウトを取っ払ってみたら、「ウィキペディア日本語版」は「日本大百科全書」よりも信憑性が高いと認知された。. LRG = Library Resource Guide. 2018, 25, p.140-147.
21) 福田亮. オープンコンテンツの百科事典ウィキペディア. カレントアウェアネス. 2003, No.278, p.6-8.
22) 兼宗進. デジタル・レファレンス・ツールとしての Wikipedia. 情報の科学と技術. 2006, 56(3), p.103-107.
23) 毛利和弘. 文献調査法 調査・レポート・論文作成必携. 第六版, 毛利和弘, 2014.
24) 毛利和弘. 文献調査法 調査・レポート・論文作成必携. 第七版, 毛利和弘, 2016.
25) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 図書館情報学用語辞典. 第４版, 丸善出版, 2013.
26) “ウィキペディアタウン”. ウィキペディア. https://ja.wikipedea.org/wiki/ウィキペディアタウン, (参照 2019-09-30).
27) 下吹越香菜. 世界で初めてのウィキペディアタウン. LRG = Library Resource Guide. 2018, 25, p.66-67.
28) 下吹越香菜. ウィキペディアタウンの開催データから見えるもの. LRG = Library Resource Guide. 2018, 25, p.102-106.
29) “プロジェクト:アウトリーチ/ウィキペディアタウン”. ウィキペディア. https://ja.wikipedia.org/wiki/プロジェクト:アウトリーチ/ウィキペディアタウン, (参照 2019-09-30).
30) “Library of the Year 2017”. IRI 知的資源イニシアティブ. 2017.12.7. https://www.iri-net.org/loy/loy2017/, (参照 2019-09-30).
31) ウィキペディアタウンのコラボ事例 ピックアップベスト５ . LRG = Library Resource Guide. 2018, 25, p100-101.
32) “Wikipedia:独自研究は載せない”. ウィキペディア. https://ja.wikipedia.

org/wiki/Wikipedia:独自研究は載せない，(参照 2019-09-30).

33)　スーザン・メイヤー．ウィキペディアを創ったジミー・ウェールズ．岩崎書店，2013，p.117.

参考文献

・山本まさき，古田雄介．ウィキペディアで何が起こっているのか　変わり始めるソーシャルメディア信仰．九天社，2008.

・ピエール・アスリーヌ．ウィキペディア革命 そこで何が起きているのか?．岩波書店，2008.

・アンドリュー・キーン．グーグルとウィキペディアと YouTube に未来はあるのか? Web2.0 によって世界を狂わすシリコンバレーのユートピアンたち．サンガ，2008.

・アンドリュー・リー．ウィキペディアレボリューション．早川書房，2009.

・スーザン・メイヤー．ウィキペディアを創ったジミー・ウェールズ．岩崎書店，2013.